

北九州市立大学
文学部紀要

第87号

マラマッド文学における暴力描写のユダヤ的特質について
前田 譲 治 ……………19

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2017

マラマッド文学における暴力描写のユダヤ的特質について

前田 譲治

序論

Bernard Malamud が執筆した作品には暴力描写が頻出する。具体的に確認すると、彼が発表した七長編の内、暴力描写が皆無なのは一編に過ぎず、他の六作品においては分量の差こそあれ、激越な暴力描写が登場する。短編小説の大半においても、暴力描写、あるいは、暴力への言及が見られる。このように、マラマッド文学において、暴力は作品の重要な構成要素となっている。ところが、マラマッド作品に見られる暴力描写に特に焦点を当てて展開された論考は、『アメリカ文学と暴力』(1995)と *Legacy of Rage* (2001) 以外を筆者は未見である。これらの論考の前者は、一作品ごとにマラマッドの暴力描写を取り上げ、それら一つ一つがホロコーストと、どのように関連しているかを考察している。後者に目を向けると、マラマッドの複数作品の暴力描写の基調の変化を経時的に辿る形で考察が展開している。そうであるならば、マラマッドの暴力描写の特質に関する先行研究は存在するものの、マラマッド文学全体によって共有されている、暴力描写の一貫性を指摘する試みは、十分になされているとは言い難い。そこで、本論考においては、マラマッド文学全体を俯瞰することにより、暴力描写全般を統括している統一的基調を考究し、それが、いかなる様相の下にユダヤ系固有の価値観を体現しているかを明確化したい。以上の作業を通して、作者のユダヤ系としての感性や美意識が、いかなる形で作中の暴力描写の基調を統括しているかを明確化したい。

I

既出の通り、マラマッド文学には暴力描写が無数に登場する。そこで、本稿においては議論の対象を、主要登場人物が行使するか、あるいは、主要登場人物が対象となる、相対的に存在感の大きな暴力の描写に限定したい。従って、存在感が瑣末な登場人物の間で行使されている暴力の描写は考察から除外する。以上の条件の下で、暴力行為の結果を、どのような基調と共にマラマッドが描いているかを最初に確認したい。SF小説の体裁を採用した *God's Grace* には、人間と同等の知能と発話能力とを有する猿が登場する。猿は複数の種族からなり、チンパンジーが他種族のオランウータンを捕食する。その際の様子が、“One by one he [Esau] tossed away the bone fragments of the shattered small skull until he had exposed the pulpy, pinkly-bloodied brain. He plucked it out with his fingers, bit into it, savoring it, chewing slowly . . .” (189). と詳述されている。殺害後に解体されたオランウータンの個々の臓器の様子が極端に微細に描写され、凄惨極まりない描写となっている。チンパンジーが行使する暴力の結果が同一基調で描かれる在り方は他にも見出せる (198)。最終場面では、チンパンジー

の Buz が主人公 Calvin Cohn (人間) を殺害する。その場面も、“Blood, to their astonishment, spurted forth an instant before the knife touched Cohn’s flesh” (223)、あるいは、“[Cohn] could see that his long white beard was flecked with spots of blood” (223) と描かれている。つまり、暴力が実行に移される前段階において、既に流血の様子が仔細に描かれている。以上の通り本作においては、暴力の結果に伴う残虐性を前景化する作者の姿勢が顕著だが、それは他作品にも共通した在り方である。

The Tenants において、作家志望の Willie Spearmint は複数の短編小説を執筆している。その一編の終末では、“He cuts into the dead man but can’t find the heart. He cuts into his stomach, bowel, and scrotum, and is still cutting when the story ends” (65) という白人に対する黒人の暴力行為が描かれている。さらに、ウィリーが小説の執筆に没頭するがゆえに放置し続けた恋人 Irene Bell と結婚することを Harry Lesser がウィリーに伝えた際に、激昂したウィリーはハリーの頭部を壁に打ち付け、さらに、彼をアパートの上階から路上に投下して殺害せんとする。その際には、ハリーが感知した “blinding pain” (167) や、“Blood flowed into his eyes” (167)、あるいは、“blood-smearred face” (169) という暴力がもたらした凄惨な結果が具体的に描かれている。さらには、“At his door the wound on his head pained as though struck a hammer blow” (174) という、ハリーがその後強いられる、暴力に起因する苦痛の継続性も具体的に描かれる。結局、投下によるハリー殺害の試みは未遂に終わるが、ハリーは、“his brains dashed all over” (168) という、投下が実行された際の脳髓が飛散した状況を思い描いている。暴力行為が実行される以前に、完遂された際の悲惨さが先行して強調される在り方は、『神の恩寵』と同一であり、暴力行為の悲惨さを印象付けようとする作者の姿勢の一貫性を指摘できる。

同様に、*The Fixer* に登場する Yakov Bok の回想においても、虐殺されたユダヤ人は “a white sausage stuffed into his mouth, lying in the road on a pile of bloody feathers, a peasant’s pig devouring his arm” (5) と描写されている。やはり、切断された人体の一部を口に詰め込まれたユダヤ人の血まみれの死体が豚に捕食される、凄惨極まりない暴力描写となっている。ヤーコフが耳にするユダヤ人虐殺の様子も、“Those who were dragged out still alive were later thrown from speeding trains. A few . . . were burned alive, and some of the women were dropped in their underclothes into wells to drown” (301) と伝えられ、残虐性が際立っている。さらには作品終末において、ヤーコフを暗殺せんとして爆弾が彼に向けて投擲される。その爆発はヤーコフ自身には危害を及ぼさないが、彼の近辺にいた警護担当者が受けたダメージが、“His foot had been torn off by the bomb. The boot had been blown away and his leg was shattered and bloody” (331) とあり、損傷した四肢の様態が具体的に描写されている。ヤーコフが想定する自己に対して行使される暴力も、“hammer nails into his head” (250) と描写されている。同じく、現実ではなく想定されている、将来に生じるヤーコフの肉体の損傷の様相も “[T]he flesh rots off your [Yakov’s] bones piece by piece” (143) と描かれている。暴力が行使されていない段階においてすら、

先行する形で暴力の凄惨な結果が提示される在り方も、『神の恩寵』や『テナント』と共通しており、暴力の結果の残虐性を際立たせようとする作者の積極的姿勢に揺るぎはない。

今度は視点を変えて、『修理屋』における致死性を伴わない暴力の描写に目を向けると、ユダヤ系老人は民族性ゆえに非ユダヤ系の少年から石を内包する雪玉を投げつけられる。その際も、“The wound was still bleeding . . .” (65). などと、反復して流血の様子が具体的に描かれている (64)。収監されたヤーコフも、反ユダヤ主義に根ざした誤解から他の囚人から殴打されるが、その結果も、“his pain-wracked, bloody head”、“the wet swollen cut on his scalp” (150) と、ダメージの多大さが詳細に描かれている。*The Assistant* では食料品店の店主 Morris Bober が強盗に殴打される。この、致命的ではない暴力の結果も、“a violent headache” (28)、“A storm cloud formed in his head and blew up to the size of a house” (33)、あるいは、“The shape of a black hat blew up in his head, flared into hissing light, and exploded” (54). と描写されている。致命的でない暴力であっても、それがもたらす結果の悲惨さが一貫して前景化されている。

短編小説に目を移すと、“Black Is My Favorite Color” では、黒人からユダヤ系の主人公が殴打される。その際にも、“a pain in my head” (29) という暴力の結果の悲惨さが具体的に明示されている。“The Lady of the Lake” では、ホロコーストの生存者 Isabella della Seta が登場するが、その胸には、“tattooed on the soft and tender flesh a bluish line of distorted numbers” (132) という形で、暴力の痕跡が時を経た現在に至るまで残存している。しかも入墨された数字が歪んでいる設定と、入墨が為されている肌の美麗さとの対照性を通して、入墨の醜悪さが強調されている。第二次世界大戦後のアメリカを背景とする“The Loan” では、登場人物が過去のホロコーストに言及する。一方、パン屋が舞台となっているため、黒焦げのパンが“charred corpses” (191) という隠喩で登場する。この直前に、“Hitler’s incinerators” (190) という表現が先行しているため、黒焦げのパンは、ホロコーストの犠牲者のイメージを読者に想起させる。このように、短編においても暴力の結果を、可能な限り悲惨さを際立たせつつ描く作者の姿勢に揺るぎはない。“The German Refugee” においては、ホロコーストによって在独の妻が殺害されたことが要因となって、アメリカ在住のユダヤ系ドイツ人 Oskar Gassner がガス自殺する。ホロコーストの間接的な被害者といえる彼の自殺後の様子も、“his face beet-red, lips bluish, a trace of froth in the corners of his mouth” (211) とあり、悲惨さが明示されている。さらに、彼の妻がドイツで殺害された際の様子を作品の語り手が説明する。その説明は、在独の妻の母がガスナーに送った難解な筆跡のドイツ語の手紙を本作の語り手のアメリカ人が苦勞して「解読し」て読み取った、“rumored” (212) という条件が付いた情報に基づく。このような、二重の不確実性を伴った情報に依拠しているにもかかわらず、妻の殺害に関する語り手の説明は、“[S]he is shot in the head and topples into an open tank ditch, with the naked Jewish men, their wives and children . . .” (212). とあり、一転して臨場感と具体性が付随している。以上の通り、現実であれ、心象風景で

あれ、暴力が行使された事実を単なる情報としてのみ伝えるのではなく、その結果を読者の嫌悪感を刺激する方向性の下に意識的に微細に描き出す点に、暴力描写の一貫性が認められる。

II

次に視点を変えて、作中の暴力行為の被害者に対して、読者が抱く感情の方向性を推察することにより、暴力描写の別形態の一貫性を明示したい。まず、『修理屋』のヤーコフは、負傷で流血しているユダヤ系老人を保護する。彼のこの行動は、“a simple act of human kindness” (Hershinow 66) と評価される。その際に、ユダヤ系のヤーコフは素性を偽って、ユダヤ系が居住を禁止されている地域に居住していた。そのため、ユダヤ系老人を自宅で保護した事実がヤーコフを冤罪に陥れるための格好の口実となり、その結果、収監されたヤーコフは悲惨な暴力の対象となる。また、ヤーコフは雇用主の娘(ロシア人)からの性的誘惑を、倫理的な理由から拒絶する。この拒絶は女性の不興を買い、ヤーコフにとって不利な、女性による証言を後に招来し、ヤーコフが冤罪に陥れられる遠因となる。つまり、ヤーコフの博愛性と倫理観とが、冤罪と収監後に被る苛烈な暴力を招いている。当然ながら、そのような過程を経て暴力に曝されるヤーコフに対して、読者は同情の念を禁じえない。

本作の重要な副次的登場人物に目を向けると、ヤーコフが収監される刑務所の看守 Kogin は、体制側に属する人物の中で、例外的にヤーコフに人道的な対応を継続する。コギンは、ヤーコフが受けた非道な仕打ちへの同情心から、ヤーコフを不正に殺害せんとした Deputy Warden を制止し、その結果、副典獄から射殺される。同様に、捜査部長 B. A. Bibikov も、法の順守を重んずる公正な姿勢ゆえに、違法なヤーコフの収監と処遇に異論を唱え謀殺される。コギンとビビコフは少数派の立場でありながら、多数派の不正を看過せず、公正に行動する。特に、コギンが受けた暴力の結果の悲惨さは、“My head aches,” Kogin muttered. He sank to his knees with blood on his face” (326) と、具体的かつ詳細に描かれている。先に確認した人物像が前提としてあるため、暴力の被害者二人に対する読者の憐憫の情は刺激されざるを得ない。

同一視点から『アシスタント』を考察すると、殴打されるモリスの肉体的な脆弱さが強調されている (7,35)。さらに、モリスの徳性、倫理性、博愛性の豊かさが強調されている。例えばモリスは、店員として雇用した Frank Alpine が店の売上金を一部横領していることを確信した後に、横領の原因が彼に与えている薄給にあると自責し、給料の引き上げをフランクに申し出ている。批評家からも、モリスは“the ethical center of the novel” (Richman 50) と位置付けられ、倫理性の高さが指摘されている。徳性の点で極めて優れた、病弱なモリスが暴力により甚大な痛手を被る有様は読者の同情を引く。

『テナント』に目を向けると、既出の通りハリーはウィリーから殺害される寸前に至る。この事件以前の、ハリーとウィリーとの関係を確認すると、複数の小説を出版済みのハリーは、作家志望

のウィリーから執筆中の小説の草稿に対する助言を求められる。その際にハリーは、自分の執筆が難渋しているにもかかわらず、その依頼に真摯に取り組み、貴重な時間を犠牲にして誠実にコメントを案出している。しかも、ハリーのアドバイスにウィリーが不条理にも激昂し錯乱状態に陥るとハリーは自責の念を覚え(77)、彼の誠実さは際立っている。また、アパートの居住者ハリーは小説執筆を優先して、建て替えを目指す家主からの立ち退き依頼を頑として拒否して一人アパートに居残っている。その一方で、部外者のウィリーはアパートに不法侵入している。家主がウィリーの不法侵入に気付いた後には、ハリーはウィリーに自室での執筆を許可する。また、ウィリーが家主に見つからぬよう、ハリーはウィリーを保護し(94)、執筆に必要な物品の提供を申し出る(32)。また、ハリーは小説執筆中に、“an exciting idea aborning that lit him like a seven-flamed candle”(79)という状況に至る。ところが、その最中にウィリーがハリーの部屋を私用で突然訪問したため、“His inspired idea, possibly for an ending, whatever it might be, lay buried in an unmarked grave”(85)と、小説に関する重大な着想を喪失する。つまり、ハリーがウィリーに対して示した友好的姿勢は、ハリーに致命的な犠牲を強いている。他方、ウィリーには、ハリーの立場への斟酌が皆無である。あるいは、家主がアパートの検分に訪れた際には、不法に居住しているウィリーが家主に見つかることをハリーは懸念し、警告を行うためにウィリーの部屋に赴く。その際にウィリーは、“He gazed at Lesser in anger at the interruption”(38)という反応を示す。ここにおいても、ハリーの愛他性と、ウィリーの自己中心的態度との対照性が際立っている。以上のような人間関係を背景として、ウィリーがハリーに暴力を行使した場合、暴力の対象であるハリーに対する読者の同情の念は必然的に高まる。

ただし、ハリーはウィリーの恋人アイリーンを略奪している。この事実は、ウィリーのハリーに対する暴力をハリー自身が招いたと読者が解釈する余地を残す。しかし、ウィリーとアイリーンの関係の本質に注目すると、“I’m not saying I don’t appreciate her company, especially when my meat’s frying, but not when I have something I got to write”(31)というウィリーの発言がある。つまり、ウィリーは、アイリーンを性欲処理の手段として第一に眺める一方、小説執筆時には彼の集中力を削ぐとの理由から彼女を忌避している。このように、彼の個人的な利益との相対関係が、ウィリーにとってのアイリーンの存在意義を決定している。さらに、ウィリーはアイリーンに関して、“If you see cunt you want cunt though she is pissing a lot lately so it ain’t that much of a problem. . . . She’s got cystitis and you can’t ball them then or the germs might penetrate in you and then you have to piss all day”(99)と述べている。また、ウィリーは、アイリーンを繰り返し“bitch”(35,167,169)、恋人を“meat”(35)と呼んでいる。このように、アイリーンとの関係を、性的関係に収斂させる傾向がウィリーには顕著である。以上のようなウィリーの姿勢の一貫性は、彼の恋人との結婚を企図するハリーの加害者性を大幅に減退させる。つまり、暴力の対象となるハリーに対する、読者の同情の希薄化を回避する前提が準備されている。

『神の恩寵』の暴力を行使される対象と行使者との関係を確認すると、被害者コーンは、虫歯の激痛から抜歯によって加害者 Esau を解放し、彼が病気の際には薬も処方している (145)。加えて、コーンは自分を殺害する寸前に至ったエサウがコーンの妻に殴打された際に生じた、彼の裂傷を縫合している (202)。このように、暴力の行使者に対するコーンの博愛的姿勢が際立っている。加えて、コーンが妻 (チンパンジー) との間に儲けた、生後間もない無力な赤子が、助命を必死で懇願する父親の眼前において、“pitched at a glowing boulder below” (213) という形で、岩に叩きつけて殺害される。その結果は“her bloody remains” (213) と具体的に描写され、暴力の結果の残虐性が前景化されている。さらには、チンパンジーの捕食の対象となり、殺害され解体されるオランウータンは幼少で行動の無邪気さが目立っている。客観的にみると、新種を創造する適任者と自己を位置付けるコーンの慢心に基く計画が、“greater losses: of his offspring, of his community, of the chimp’s ability to speak, and finally of Cohen [sic] himself” (Mesher 119) に帰結し、チンパンジーと比較した場合、彼の行動の難点が目立つ。しかし、先述した類の暴力を行使するチンパンジーに読者が感情移入することは極めて困難であり、感情移入の対象となるのはコーンであろう。そうであるならば、チンパンジーの暴力の対象全般に、読者が憐憫の情を覚えることを促す設定が設けられている。

短編小説に目を向けると、“The First Seven Years”、“Take Pity”、“The Last Mohican”、「借金」に暴力描写自体は登場しないが、登場人物の思惟や回想の中にホロコーストが登場する。上記四短編と既出の「ドイツ難民」においてホロコーストの犠牲となる、あるいは、辛くも犠牲になることを逃れる登場人物は何れも、何の咎もない無辜の人物である事実が強調されている。「黒は私の好きな色」においては、合意の下に交際している黒人女性を伴ってユダヤ系男性が街中を歩いていたことが原因となって、黒人から殴打される。このユダヤ系男性は、黒人を積極的に好待遇で雇用する店主でもある。“The Jewbird”において虐殺されるのも、“the poor bird” (105) と作中人物によって位置付けられる、擬人化されたユダヤ鳥である。以上の通り、短・長編を問わず、暴力の対象となる人物に対する読者の同情の念を刺激する状況設定が準備されている。しかも、前章で確認した通り、その暴力がもたらす結果は、悲惨さが基調として設定されていた。とすれば、読者に明確な反発を喚起する方向性の下に暴力描写は展開している。この点は、さらに別の観点から例証することが可能である。

III

暴力を行使する主体の属性の基調について考察すると、『アシスタント』において最も暴力的な登場人物 Ward Minogue は、初登場の際に、“the dirty handkerchief”で覆われた顔は“pimply”で、かつ、“sweat”が噴き出している (25)。以上と全く同一の、視覚的な醜悪さを際立たせる外面描写が、後に再度ワードに割り当てられている (71)。さらにワードには、“[Ward] stinks …” (72)、“stinking

of whisky” (165)、“his smelly hand” (167)、“his stinking presence” (167) という描写も付随し、嗅覚面での醜悪さも基調として与えられている。さらに、彼が覚える感覚は、“My heartburn” (71)、“a bad heartburn” (144)、“gas pains” (166)、“a goddam headache” (166)、“nausea” (215, 216, 217)、“dizzy” (216) と描写されている。間断なく知覚される諸々の不快感も彼の特性として設定されている。さらに彼は、糖尿病と壊疽に罹患している (216)。以上の通り、万人が嫌悪感を覚え、忌避せざるを得ない属性がウォードに対して一貫して配置されている。

『アシスタント』との関連性に注意しつつ『修理屋』を眺めると、検事 Grubeshov の捏造による冤罪で収監されたヤーコフは看守による継続的な暴力に苦しめられる。ヤーコフが被る暴力の源泉とも言うべきグルベチョフは、ヤーコフに対して直接的にも苛烈な暴力を行使する。そのようなグルベチョフも、口腔から嘔吐を催させるほど強烈な悪臭を発する (298)。また、刑務所内で最も苛烈な暴力をヤーコフに振るうのは副典獄である。彼は、ヤーコフに対して同情的な看守コギンを射殺する。そのような副典獄の靴は異様な悪臭を放っている (194)。ヤーコフに恒常的に暴力を行使する看守 Berezhinsky も “a dirty finger” (325) の持ち主であり、汚穢の要素が割り当てられている。ヤーコフに対して、反ユダヤ主義に起因して暴行を加える同房の囚人にも、“his rotten teeth” と “foul-breathed” (107) という状態が付随する。さらに、虚偽の証言を行使してヤーコフを冤罪に陥れようとする点で、ヤーコフが被る暴力の一因をなす Father Anastasy には “the stink of garlic rising” (137) が付随する。*Dubin's Lives* に目を移すと、敷地内に無断で侵入した William Dubin に問答無用で銃撃する農夫は、滝のような汗を流し、汚れた作業ズボンと泥まみれの皮のブーツを着用している (322)。以上の通り、暴力を行使する主体に、五感に訴える多彩な醜悪さが付随する構成が、複数作品に共有されている。

別作品に目を向けると、『テナント』の暴力的なウィリーが執筆した原稿は、“an unpleasant odor” (29)、“the sulphurous smell” (29-30)、“malodorous” (30)、“funky” (57)、“Stench” (59)、“sweat plus something mildewed” (59)、“sulphurous” (59)、“farts” (59) などの表現と連結され、悪臭が明確な属性として設定されている。さらに、ウィリーが使用しているマットレスも、“piss-smelling” (91) や “stinking” (179) と描写される。現実には、作品の舞台となっているアパートの室内全体が “smelly” (93) という状態にあるため、悪臭の原因がアパート自体である可能性を否定できない。それにも関わらず、悪臭とウィリーとを作者は連結している。ウィリーが執筆した原稿の外表面も “soiled” (29)、“soiled and smeared” (156) といった、視覚的な醜悪さが際立たされている。ウィリーがハリーの殺害を企図する際の彼の腕も、“his sweaty armlock” (168) と描写され、不衛生さが基調となっている。

同様の視点から『神の恩寵』を眺めると、最も暴力的で獰猛なエサウには、“He smelled of vomit . . .” (120)、“a dreadfully foul smell” (208)、“a sulphurous odor” (208) という描写が伴い、

悪臭がエサウの属性として与えられている。エサウの外貌に目を向けても、“his yellowed fangs repulsively visible” (152)、“his soiled bondage” (208)といった、醜悪な描写が頻出する。特に、“sulphurous”と“soiled”の二単語は、『テナント』のウィリーの描写にも付随していた(29-30, 59, 156)。加えて、既出の通り、ウォード(25, 71)、ウィリー(168)、ドゥーピンを銃撃する農夫(322)が、共通して多汗性を属性として与えられている。以上のような、醜悪基調の描写における共通単語の使用からは、執筆中のマラマッドの脳裏において、エサウとウィリー、さらには、ウォード、ウィリー、農夫とが連動していた可能性を指摘できる。つまり、暴力的な登場人物を、明確に統一的なイメージと共に提示しようとするマラマッドの姿勢を読み取れるのだ。

加えて、暴力性が際立っているエサウは性衝動に完全に支配され、コーンと対話する際も、その事実を下記の通り赤裸々に伝える。

“Your [Cohn’s] stupid schooltree has made her [Mary Madelyn] too proud to dip her butt for friends.” (153)
Esau said that masturbating gave him a headache and he would prefer something more practical. (186) “You’re a lucky prick,” said Esau, regarding him [Cohn] enviously. “I bet you get it every night.” (187) “[O]nly our Jewish instructor [Cohn] has sex whenever he might want it, with somebody who happens to be related closer to us; and the rest of us have nothing but our dongos to pull.” (194)

エサウはチンパンジーではあるが、完全に擬人化されているため、上記の一連のエサウの発言は、読者の視点に極めて倒錯的と映らざるを得ず、読者は不快感を禁じえない。実際にエサウは、“... Esau is undoubtedly an objectionable character...” (Abramson 122)、あるいは“the most vicious” (Helterman 114)と、その行動様式の醜悪さが指摘されている。

『テナント』に目を移すと、ウィリーは、“Sundays I ball my sweet bitch” (35)、“My bitch is itching” (68)と性的蛮勇ぶりを好んで誇示する。彼は、レーザーが女性との交友を欠いている事実を知った後には、自身の性的活動の旺盛さの誇示を以下の通り露骨に展開する。

“Like what do you do with your nature, man? Like with your meat tool? You got no girl, who do you fuck other than your hand?” (88) “If you see cunt you want cunt though she is pissing a lot lately so it ain’t that much of a problem. . . . She’s got cystitis and you can’t ball them then or the germs might penetrate in you and then you have to piss all day.” (99)

しかも、以上の赤裸々な発言を、ウィリーは知り合った直後のハリーに臆面なく行っている。さらに、ハリーがウィリーの恋人アイリーンと結婚することを知り悲憤したウィリーは、“She couldn’t even

fuck before I taught her” (167). と発言している。以上の通り、彼の性衝動もエサウと同じく、倒錯的な次元に至っている。

このようなウィリーの性向を踏まえると、ウィリーとハリーとが各々相手の殺害を企図する、“Lesser felt his jagged ax sink through bone and brain as the groaning black’s razor-sharp saber, in a single boiling stabbing slush, cut the white’s balls from the rest of him” (230). という幻想的な最終場面の本質が明らかになる。この描写は、ハリーとウィリーの暴力の異質性を物語る。つまり、ウィリーはハリーの殺害を纯粹に企図せず、去勢を目指している。このウィリーの姿勢は、彼の性的欲望の発散の手段であるアイリーンをハリーが奪ったことに対する報復と読め、やはり、彼の性衝動の倒錯性が際立たされている。

さらに、『修理屋』で最も暴力性が際立っている副典獄に注目すると、“The Deputy Warden probed with his four fingers in Yakov’s armpits and around his testicles” (194). という行動が見られる。つまり、副典獄は職務を利用して個人の倒錯的嗜好を満足させている。「黒は私の好きな色」においても、黒人女性と交際している点に着目してユダヤ人に暴力を振るう黒人は、“No more black pussy for you” (29). と発言しており、暴力が、性衝動に起因するものとして位置付けられている。『アシスタント』のウォードも、幼少時から現在に至るまで女性に対する猥褻行為の常習犯である (49, 165)。このように、暴力の主体となる登場人物の大半は、五感に訴える醜悪さのみならず、性欲を制御できない獣的側面も有し、読者の唾棄の念を二重に増幅する。

以上の概観から、複数の次元での醜悪性が際立った人物が、読者が共感や同情を寄せる人物に、暴力によって悲惨極まりない害悪を及ぼすのが、マラマッド文学の暴力描写の基本構造といえる。このように眺めると、作中の暴力に対する、読者の強い拒絶反応を喚起することを作者は企図している事実が判明する。

IV

今までに確認できた基調とは相容れない暴力描写も、少量ながらマラマッド文学には認められる。この事実が有する意味を以下に考察したい。まず、*The Natural* に暴力描写自体は頻出する。ところが、主人公 Roy Hobbs を銃撃する、作中で最も暴力的な Harriet Bird は、臭気、外見、性的嗜好などに関して、読者の不快感を喚起する側面が皆無である。加えて、作中に登場する最大の暴力である銃撃の被害者、ロイに読者が憐憫の情を覚えるのは以下の理由ゆえに困難だろう。まず、初対面の女性ハリエットに対して、ロイは性的に放埒な姿勢を露骨に示す (29)。このようなロイの振る舞いの直後に、ロイの投球をプロテクターで直接受けたことが原因で、ロイを大リーグにスカウトした Sam が死亡した事実が示される (32)。しかしながら、その次の場面においても、ロイはハリエットに対する性的欲求に駆られ続けている (34)。ロイは性衝動の点では、むしろ、エサウ、ウォード、

ウィリーの系譜に連なる人物である。また、ロイは、彼の知己であるサムが自身の投球が原因で死亡した事実に関心なく、彼の無神経と自己中心主義は際立っている。そもそも、彼が性衝動に駆られてハリエットに接近し続けたことが、彼が銃撃される最大の要因である。そのような前提のもとに暴力の被害者となったロイに、読者が憐憫の情を覚えることは困難だろう。

次に、ハリエットがロイを銃撃した際の様子を、以下の引用において確認したい。

She pulled the trigger (thrum of bull fiddle). The bullet cut a silver line across the water. He sought with his bare hands to catch it, but it eluded him and, to his horror, bounced into his gut. A twisted dagger of smoke drifted up from the gun barrel. Fallen on one knee he groped for the bullet, sickened as it moved, and fell over as the forest flew upward. . . (34-35) (下線は筆者による。)

銃弾がロイの肉体を激しく損傷しているのが実情だが、肉体の損傷の具体的描写が上記引用には不在で、流血描写も完全に割愛されている。さらに、銃弾がロイの肉体に命中した際も、“bounced into”と婉曲的に描写されている。加えて、銃弾の命中によりロイが知覚しているはずの激痛も、“sickened”と間接的に表現されている。「黒は私の好きな色」において、ロイが被った銃撃よりもはるかに暴力性が低い殴打であるにもかかわらず、“a pain in my head” (29) と、主人公の苦痛が明示されるのとは対照的である。その上、ハリエットからロイが銃撃された箇所の直後の場面では、銃撃から15年が経過している。その結果、銃撃が招来したはずのロイの肉体的苦痛や後遺症等の描写も、完全に割愛されている。銃撃の結果、ロイの大リーグへの参入が19歳から34歳に遅延するが、加入後は打者として“the fantastic hundreds of records he [Roy] had broken in so short a time” (189) を達成する破天荒な活躍を見せ、負傷の後遺症は絶無である。むしろ、ロイに致命的な害悪をもたらすのは八百長絡みの賄賂の受領で、彼は選手生命を剥奪されるに至る。それ以前にも、ロイが暴飲暴食を行ったことが原因で入院と欠場を強いられ、それが祟って、ベナントの帰趨を決する重要な試合で彼の所属チームは敗戦を喫す。彼が過度の食物摂取を行った直後には、この世に存在するとは信じられないほどの激痛を知覚している (185)。以上の彼の自発的な行動が招来する害悪と比すれば、銃撃が招く害悪は相対的に矮小化される。以上の通り、『ナチュラル』においては、暴力がもたらした結果の凄惨さが徹底して緩和して描かれている。『ナチュラル』の暴力描写は、既出の暴力とは対照的に、その存在が情報として伝えられるに過ぎない。

続けて暴力描写の異質性に注意しつつ、“Behold the Key”を眺めると、鍵の投擲により主人公 Carl Schneider を負傷させる De Vecchis にも読者の不快感を喚起する属性が皆無である。加えて、デ・ベッキスから投げつけられた鍵がカールの額に残す傷跡も、“a mark he could not rub out” (83) と描写され、暗示に留まっている。「湖上の貴婦人」のイザベラが強制された入墨が登場する際に、

肌の美しさを致命的に棄損する醜悪さが具体的に描かれていたのとは対照的である。さらに、“Talking Horse”においては、擬人化されている馬に対して飼い主が暴力を行使し、馬は“a flash of pain” (179)を感じる。しかし、その直後に暴力の対象となった馬の“*But the true pain, at least to me, is when you don't know what you have to know*” (179).という発言が続く。この発言との相対関係において、飼い主の行使した暴力の与える肉体的苦痛は大幅に緩和される。

短編集 *Pictures of Fidelman* に僅かに登場する暴力描写に目を移すと、“Naked Nude”において、Arthur Fidelman はマフィアの一員に複数回殴打され、その様子が “[Fidelman's face] turned red and the tears flowed freely” (72).と描かれるが、肉体の損傷や苦痛は具体的には描かれない。マフィアがフィデルマンに再度、行使する暴力 (85) や、逆にフィデルマンがマフィアに行使する暴力 (93) の描写においても、暴力の存在が情報として伝えられるのみで、具体的描写は不在である。そもそも、フィデルマンがマフィアに拘束されたのは、彼が窃盗を試みたことが原因である。すなわち、フィデルマンが被る暴力は、フィデルマン自身の反倫理性に起因している。さらに、“*Pictures of the Artist*”において、地面に掘った二つの穴の見学希望者から見物料を徴収していたフィデルマンは、見知らぬ男性からシャベルで殴打される。その結果にしても、“*toppling as though dead into the larger of the two holes*” (160) とのみ描かれ、受け手の肉体的損傷や苦痛への言及が不在である。また、フィデルマンは単なる穴を芸術と強弁し、詐取とも言える手法で観覧料を徴収している。その上、殴打される直前のフィデルマンは、困窮している男性からの返金要求を頑強に拒否している。フィデルマンを殴打する男性は、殴打の直前に、先の困窮した男性へのフィデルマンの応対を問題視している。このように、「画家の絵」においても、暴力の被害者たるフィデルマンに対して、読者が憐憫の情を抱き難くなる前提条件が複数設定されている。

本稿で確認した通り、マラマッド文学において、暴力描写は複数の側面において読者の唾棄の念を喚起する方向性を維持していた。その一方で、本章で確認した通り、読者の拒絶反応を引き起こす度合いが相対的に低い、完全に異質な暴力描写も少量ながら見い出せた。以下において、このような露骨な対照性が、同一作家の暴力描写において、何故に生じたのかを考察したい。以降、便宜的に、前者の基調の暴力描写をAタイプ、後者をBタイプと呼称する。

V

最初にAタイプの暴力を行使する主体の特質を確認したい。まず、『修理屋』においては、ユダヤ人ヤーコフを冤罪の捏造によって犯罪者に仕立て上げ、国民の不満を国家から逸らそうとする帝政ロシアの政策への言及がある。それは、ユダヤ系の居住地域や移動を制限するユダヤ系に対する差別的な国策の延長である。つまり、反ユダヤ主義が、本作に反復的に登場する対ヤーコフの暴力の根底に横たわっている。『テナント』のウィリーは、“*Fartn Jew slumlord*” (41)、“*Jewbastard*” (51)、

“rat-brained Jews” (75)、“a Jew ofay” (165)、“Jewprick” (169)などのユダヤ人蔑視発言を、ユダヤ系のハリーに対して行う。さらに、ウィリーは苛烈な反ユダヤ感情を、ハリーがユダヤ系であることを知りながら、彼に対して以下の通り露呈している。

The Jews got to keep us bloods stayin weak so you can take everything for yourself. Jewgirls are the best whores and are tryin to cut the bloods down by makin us go get circumcise, and the Jewdoctors do the job because they are afraid if they don't we gon take over the whole goddamn country and whip you out. (50)

他にも彼の小説には、“Willie had rewritten the pogrom twelve times . . .” (220). という特徴があり、“The way to black freedom is against them [Jews]” (220). と記されている。ウィリーは白人への敵対感情を有するが、白人の中でもユダヤ系への憎悪の念が際立ち、“a ferocious, a mythic, anti-Semite” (Ozick 92) と評価される。一方、既に眺めた通り、ユダヤ系の恋人アイリーンをハリーが奪った事実を知った際に、ウィリーはハリーの殺害を試みる。他方、ウィリーは、アイリーンを性欲の発散の手段として一義的に見ている (31,99)。さらに、彼は、“I had a friend of mine once and he got circumcise for his Jewbitch and now he ain't no good in his sex any more, a true fag because he lost his pullin power” (50). と述べ、ユダヤ系女性との交遊を危険視している。このような認識を有するウィリーが、ユダヤ系女性を奪ったハリーを即座に殺害しようとするのは、余りにも極端な反応と映る。しかしながら、彼の狂猛な反ユダヤ主義を視野に入ると、アイリーンを奪ったハリーがユダヤ系である点が、ウィリーの殺意を引き起こす要因となっていると説明できる。以上の二作品に確認できた反ユダヤ主義に支えられた暴力描写の同類は、他作品にも見られる。

『神の恩寵』のブズは、コーンのヤムルク（男性ユダヤ教徒が着用する縁なし帽）を破棄し (54)、コーンがカディッシュ（ユダヤ教の頌栄）のレコードをかけると耳を塞ぐ (79)。また、コーンがユダヤ教に則った祭礼（過ぎ越しの祭り）を行なった際に、ブズは非ユダヤ系の飼主から受け継いだ、キリスト教式の所作を二度行い、それは他の参加者のチンパンジーに伝播する (113-14)。このようにブズは、コーンが執り行うユダヤ教に基づいた祭礼を意図的に妨害している。明らかにブズは、コーン以外の人類が滅亡した中であって、ユダヤ教の残存の阻止を企図している。ブズの反ユダヤ的性向は、無名のゴリラに“Adolph”という、Hitler を連想させる命名を熱望する点にも顕著である (81)。対照的に、そのゴリラは、ユダヤ教の祈禱歌のレコードやコーンが語るユダヤ民族史を好み (79-80)、コーンの死に際してはヤムルクを着用してカディッシュを唱える (223)。そのような親ユダヤ的なゴリラを、ブズは徹底的に唾棄する (80)。ブズ以外のチンパンジー、エサウも、“Jewbone” (201) というユダヤ人蔑視発言をコーンに対して行い、ユダヤ教の祭礼に用いられる食物を“moldy matzos” (194) と唾棄する。後に、チンパンジーたちはコーンの住居を襲撃するが、その際にエサウ

は、ユダヤ教の祈りが録音されたレコードを特に入念に破壊している。つまり、この作品は、チンパンジー群に蔓延する反ユダヤ主義を描いている。さらに、チンパンジーはオランウータンを好んで捕食するが、この性向は、コーンがチンパンジーに対して提示した、モーセ五書に基いたコーンの勧め“Thou shalt not kill” (171). の拒絶と解釈できる。コーンの視点がユダヤ教の世界観に依拠している点を考えれば、チンパンジーによるオランウータンの捕食は、ユダヤ的世界観の意識的な否定と読める。以上の通り、Aタイプの暴力描写が見られる『修理屋』、『テナント』、『神の恩寵』において、暴力を行使する主体は、反ユダヤ主義が行動の中核を占める共通性を有する。同様に、『アシスタント』のウォードの場合も、強固な反ユダヤ主義がモリスへの暴力の根底にあった (25-26)。

次に短編小説におけるAタイプの暴力描写に目を移すと、「黒は私の好きな色」で黒人がユダヤ系主人公を激しく殴打する際に、“a Jew landlord” (28)、“Jewboy” (29)と面罵し、やはり反ユダヤ感情に依拠して暴力を行使している。『ドゥービンの生活』において、ドゥービンに銃を乱射する、外見の醜悪さが際立った農夫も、“I’ll git you, you-Jew-son-of-a-bitch . . .” (322). と銃撃の際に罵倒しており、反ユダヤ主義がドゥービンに対する暴力の根底にある。短編小説に登場する多くの無辜の登場人物を死に追いやる設定の暴力も、ホロコーストであった。「ユダヤ鳥」でも、ユダヤ鳥への暴力の結果は、“a dead black bird in a small lot near the river, his two wings broken, neck twisted, and both bird-eyes plucked clean” (113) と究極的な凄惨さを伴っている。このような暴力を行使した主体も“Anti-Semeets” (113) と明示されている。このように短編、長編を問わず、Aタイプの暴力描写と反ユダヤ主義とが連結される構成が支配的である。

他方、『アシスタント』における Helen Bober に対するフランクの暴行は、“Even as he spoke he thought of her as beyond his reach, forever in the bathroom as he spied, so he stopped her pleas with kisses. . . . Afterward, she cried, ‘Dog—uncircumcised dog!’” (168) と描写の中途省略が行われ、暗示に留まっている。フランクのヘレンへの行為は二人の人間関係を継続的に悪化させるが、フランクの贖罪的な行動を通してヘレンは軟化し、ヘレンは彼を許すに至る。つまり、フランクの暴力は被害者によって免罪されている。ここで、フランクのユダヤ系に対する認識の在り方を確認すると、当初、フランクは食料品店の店主モリスがユダヤ系である事実が契機となって強盗に加担する決意を固めており、反ユダヤ主義に駆られていた。フランクは、強盗の相棒 (ウォード) が店主を負傷させたことに悔恨の情を覚えモリスへの助力を申し出た後も、ユダヤ系に対する蔑視感情を抱き続けている。しかしながら、最終的に彼は自発的にユダヤ教に改宗しており、反ユダヤ感情から完全に脱却する。以上の通り、最終的に反ユダヤ主義から完全に脱却するフランクが行使する暴力の描写はBタイプである。『ナチュラル』、『フィデルマンの絵』、「見よ、この鍵を」、「もの言う馬」にもBタイプの暴力描写が登場していたが、上記作品の暴力も、反ユダヤ主義との関連性が皆無である。次に、本章における議論と、暴力描写が不在の作品との関連性を考察したい。

以下の短編、“The Girl of My Dreams”、“A Summer’s Reading”、“A Choice of Profession”、“Life Is Better Than Death”、“The Maid’s Shoes”、“The Letter”、“In Retirement”、“Rembrandt’s Hat”、“Notes from a Lady at a Dinner Party”には暴力描写が登場しない。“My Son the Murderer”においては暴力に傾倒する若者が登場するが、暴力が行使されることはない。以上の短編小説には、ユダヤ系と明示される登場人物が絶無という共通項がある。また、短編“The Mourners”、“Angel Levine”、“The Bill”、“The Magic Barrel”、“Idiots First”、“The Cost of Living”、“Suppose a Wedding”、“The Silver Crown”と *A New Life* において、主人公はユダヤ系であるが、暴力描写は登場しない。これらの長・短編においては、反ユダヤ主義への直接的言及が不在という共通性が見られる。つまり、反ユダヤ主義への直接的言及が不在の作品においては、暴力描写が見られない一貫性を指摘できる。

“Man in the Drawer”においては、“a place of spiritual holocaust” (Watts 143) と位置付けられているソ連が作品の舞台となっている。しかしながら、当局による自由の剥奪に対する主人公の懸念のみが描かれ、暴力描写自体は登場しない。それゆえ、この作品は、前段落で確認した暴力描写の一貫性と齟齬をきたしていると映る。ただし、本短編においては、ソ連当局によって問題視されるのが反ユダヤ主義的な小説の執筆である点が、作中に登場する短編小説の中で提示されている。つまり、作中短編において、ある作家が執筆した小説を読んだ編集者は、“[Y]ou may be accused of anti-Semitism.” と判断し、その結果、小説の“anti-Soviet sentiment”を危険視している(93)。別の作中短編では、ユダヤ教の礼拝用の肩衣を売却しようとした若者が警察に逮捕される。しかし、それは、若者が肩衣の売値をつり上げることに拘泥したために、肩衣を購入できなかったシナゴグの下級役職者が警察に通報した結果である。若者の逮捕には宗教的な肩衣を営利目的に利用する姿勢と、ユダヤ教会の役職者の意向とが前提として存在している。他の作中短編では、ユダヤ教の過越し祭に必要な種なしパンが、当局の意向によって生産と流通ができなくなった社会情勢が描かれる。主人公は苦勞して種なしパンを導師から手に入れるが、それは種なしパンに事欠いている他のユダヤ人によって盗まれてしまう。つまり、究極的落胆と害悪とを主人公にもたすのは、当局ではなく他のユダヤ人である。作中の現実にも目を向けても、ユダヤ系主人公がソ連当局によって被る実害は、ソ連到着直後の空港における、彼が所有していたアメリカ人作家執筆の詩集の没収であり(41)、反ユダヤ主義に起因するものではない。以上の在り方ゆえに、ソ連社会の描写基調を反ユダヤ主義に収斂させることは困難で、この点で、暴力描写が登場しない本作の在り方は、マラマッド文学の暴力描写の基調から逸脱するものではない。反ユダヤ主義への言及が不在の、“The Death of Me”(66)においてのみ、唯一例外的に凄惨を極めるAタイプの暴力描写が登場する。このようにマラマッド文学全体を俯瞰すると、ごく少数の例外はあるものの、反ユダヤ主義の作中における有無が、暴力描写の有無、あるいは暴力描写の基調を大きく左右している事実が判明するのだ。

VI

本稿に既出のマラマッド文学における暴力は、自己の欲望の充足のために他者の肉体を棄損する一貫性があった。ところがマラマッド文学には、そのような、他者の自由を一方的に侵害する暴力に抗う形で行使されているがゆえに、反倫理的と位置付けることが困難な暴力も登場する。このような類の暴力に対する作者の評価姿勢を以下に確認することにより、暴力描写における基調と反ユダヤ主義との関連性をより明確化したい。まず、『アシスタント』において、ウォードはヘレンに性的暴行を加えようとする(167)。その際に、フランクはウォードに暴力を行使し、その結果、ウォードはヘレンへの暴行を断念し退散する。それゆえ、フランクの暴力には肯定的な位置付けがなされていると映る。しかしながら、そのような位置付けは持続しない。なぜなら、ウォードが逃走した直後に、ヘレンがフランクによる性的暴行の被害者となるからだ。以上のストーリー展開は、反倫理的な暴力に対して暴力を以て対抗することが、解決策たりえない様子を伝えている。この在り方を踏まえて、ウォードの父子関係に目を向けると、作品内における統一的基調が鮮明になる。

ウォードの父 Detective Minogue は、反道徳的な息子への教育手段として、対話ではなく暴力的な体罰を一貫して採用している(49, 72, 165)。例えば、窃盗を試みた息子が倉庫に隠れた際に、警部は息子が潜んでいると推測される方向に闇雲に発砲している。警部は息子を殺害する可能性を伴った暴力すら行使している。さらには、発砲に怯えて倉庫から出てきた息子を警部は激しく殴打している(216)。その際に息子に対して警部が行う唯一の説諭は、今後、類似した行動を行った場合は殺害するとの恫喝である。以上の通り暴力に依存した教育方針を警部は貫いているが、それが息子の人格の矯正に全く効果を挙げていない点が、現在のウォードの極度の反倫理性から明白である。教育的意図に基づいた警部の暴力がウォードにもたらす状況の視覚面に注目しても、ウォードの流血の凄惨さに焦点が当てられ(49, 216)、読者が受容しがたい基調となっている。さらには、父親の激しい殴打が招いた苦痛から逃れんとしてウォードは酒屋に侵入し飲酒を行う。その際に、ウォードは酒が床に散乱した状況で不用意に喫煙し火災を引き起こし、酒屋の焼失と自身の焼死を招く。この火事は、酒屋の上階の住人の生命を危険に曝す。このストーリー展開は、暴力に完全に依存したミノグ警部の教育方針を、害悪のみを招く存在として位置付ける。反倫理的な暴力に暴力を以て対処する姿勢の不毛性が、ミノグ警部とフランクの行動を通して、共通して描き出されている。ところが、『修理屋』においては、その基調が一変する。

『修理屋』の主人公ヤーコフは獄中生活を通して、“[S]elf-knowledge and historical consciousness are insufficient unless the wisdom they offer is accompanied by the willingness to step outside the limitations of a necessarily ego-centered life to identify personal suffering with the community’s historical pain and anguish” (Alter 169). という認識に至り、“spiritual victory” (Hershinow 69) を達成する。その段階に至った彼は、想念においてではあるが、反ユダヤ主義に起因する不正義の放置に対する責任を問う形でロシア皇

帝を射殺する。さらにヤーコフは、“Death to the anti-Smites! Long live revolution!” (335) と述べ、暴力の行使を積極的に唱道する。他方、法律を遵守し、ヤーコフに対する不当な処遇に異論を唱え続けた捜査部長ビビコフと人道的な看守コギンが共に違法に殺害されている。さらには、時の為政者によって、いかに、反ユダヤ主義が国民の目を欺くために悪用されてきたかが、歴史的文脈の下に明確に説明されている (308-10)。加えて、ヤーコフの想念における、皇帝の射殺後の様子は、“the stain spreading on his breast” (334) と描写され、流血の直接的描写が回避され、そこに残虐性は認められない。何よりも、想念において皇帝の射殺を行うヤーコフは、獄中の苦難を通して作品が肯定する生き方を体得している。以上の複数の前提が存在するために、暴力を行使し提唱するヤーコフに読者は同意せざるを得ない。そのため、暴力に対して暴力で対抗するヤーコフの姿勢は肯定的な基調を帯びる。

次いで注目すべきは、副典獄がヤーコフを挑発し彼の不敬な態度を誘発しようとする場面だ。挑発に応じてヤーコフが不敬な態度を示すと、それを理由として副典獄はヤーコフを射殺せんとする。それを見たコギンは、副典獄の首筋に銃を突きつけヤーコフの命を守る。その際にコギンは銃撃するが、それは、ヤーコフを違法に処刑しようとした副典獄に対する威嚇のために、天井に向けてなされる。その直後に、コギンは副典獄から射殺されている。そもそも、些細な不敬を理由に獄中でヤーコフを処刑することは、反ユダヤ主義に立脚した多くの法律が制定されているロシアであっても、違法である。この事実は、銃声が刑務所内で響き渡った際に、ヤーコフの身柄を確保する責任を負った看守長が、ヤーコフが射殺されたことを懸念して狼狽している事実から明確だ (326)。処罰に値する、法に反する行為を行おうとしたのは副典獄である。他方、コギンは、違法行為に出んとした副典獄を、法を遵守する姿勢を貫いて制止し射殺されている。そうであるならば、副典獄に対する暴力は、むしろ行使すべきものと評価できる。とすれば、ここにおいても、暴力に対して暴力で報いる姿勢が肯定されている。このような視点は他作品にも見られる。

『神の恩寵』において、体力面で圧倒的に優位なエサウに撲殺される寸前に至ったコーンは、“Stealthily he felt behind him for his 30.06 Winchester, at the same panicky instant thinking, I mustn't use it” (153) と描写されている。このように、コーンに対して粗暴なエサウへの銃による反撃をコーンは逡巡する。あくまでもコーンは説論によるエサウとの共存を模索している。コーンが銃撃を回避したためエサウは延命するが、その結果、エサウは、幼少のオランウータンやコーンがチンパンジーとの間に儲けた赤子を虐殺する。その後、コーンは我が子を殺害された怨嗟ゆえに、エサウと認識した暗闇の中に佇む猿に向けて槍を投擲するが、意に反して全く無関係の別の猿を殺害する。つまり、コーンがエサウに対する暴力の行使を躊躇したことが、種々の惨禍を許している。このストーリー展開から判断して、本作でも『修理屋』の場合と同様に、暴力に対して暴力で対応する姿勢は否定されていない。

「ユダヤ鳥」においては、Harry Cohen（人間）の家庭に住み着いたユダヤ鳥が、彼に対して苛烈な暴力を行使するコーエンの鼻を嘴で挟む形で反撃する。コーエンは、ユダヤ鳥の捕食を渴望する猫の飼育を、鳥の到着後に開始している。明らかに彼は猫によるユダヤ鳥の抹殺を企図しており、コーエンがユダヤ鳥に対して行使する暴力には殺意が潜在している。Robert Solotaroff もコーエンの対ユダヤ鳥の暴力に殺意を認めている (79)。しかも、ユダヤ鳥は博識で、コーエンの息子の家庭教師となり、息子の学力の向上に大きく寄与している。そのような利発なユダヤ鳥を、当然ながらコーエンの息子と妻は好意的に受け入れている。さらに、人間と鳥の体格差ゆえに、コーエンの暴力が致死性であるのに対して、ユダヤ鳥の暴力は致死性を伴いえない。このような背景のもとに、コーエンに対するユダヤ鳥の暴力的な反撃はなされているため、それは、肯定的な色彩を帯びることになる。

以上の通りマラマッド文学においては、暴力に対して暴力で報復する姿勢に関して、対極的な二通りの評価が展開している。ここで、ウォードのヘレンに対する暴力とミノグ警部の息子ウォードへの暴力とが、共に反ユダヤ主義とは無縁な事実注意到したい。ウォードは日常的に強烈な反ユダヤ主義に駆られているが、ユダヤ系のヘレンに性的暴行を試みる際には肉欲のみに駆られている。一方、ヤーコフとコーンとが受ける暴力は反ユダヤ主義と表裏一体の関係にあった。同様に、コーエンのユダヤ鳥への致死的な暴力の源泉は、コーエンの“genuine anti-Semitism” (Abramson 134) にある。この視点は、コーエンの暴力を、“the Cossacks or a gentile mob” の暴力に喩え、従って、コーエンの暴力に反ユダヤ主義の内在を認める他の批評家の指摘 (Solotaroff 79) と共通性を持つ。そうであるならば、反ユダヤ主義に依拠していない暴力に対する、暴力による反撃は肯定されない一方で、反ユダヤ主義に端を発する暴力に暴力で対応する姿勢は肯定される一貫性がマラマッド文学に内在している。

加えて、既に確認した通り、暴力描写の凄惨さ、その行使者の醜悪さ、暴力の被害者が置かれる状況の悲惨さに関しても、対照的な二種の描写基調が認められた。そのような、二種の基調の分岐点となっていたのも、暴力と反ユダヤ主義との連結関係の有無であった。このように、複数の局面において、反ユダヤ主義との関連性が決定的な要因となって、暴力描写の基調が大きく左右されている。この事実と、ユダヤ系が暴力に対して一般的に下す評価とがどのような関係にあるのかを、以下に考察したい。

最初に Philip Roth が提示したユダヤ系の自画像に注目すると、ユダヤ系と暴力との縁遠さに焦点を当てたものとなっている。

We're [Jews] the sons appalled by violence, with no capacity for inflicting physical pain, useless at beating and clubbing, unfit to pulverize even the most deserving enemy, though not necessarily without turbulence, temper,

even ferocity. We have teeth as the cannibals do, but they are there, imbedded in our jaws, the better to help us articulate. (*Patrimony* 111)

同様のユダヤ系の自画像は、“At the same time, nonviolence and peace are ultimate goals of the Jewish people” (Falk 92). という見解を通して提示されている。類似したユダヤ系が提示した自画像は他にも見られ、ユダヤ系は自らを捕食される存在とみなし、捕食する側とは見ないというユダヤ系の見解 (Hoberman 35) や、“Submission is morally superior to violent resistance” (Rosenberg 35). というユダヤ系の世界観が指摘されている。さらには、暴力性の高い活動である狩猟は残虐なものとして眉をひそめるのがユダヤ系の一般的な反応であるとの観察も見られる (Hoberman 35)。次いで、ユダヤ系にとっての英雄的行動に目を向けても、“But nowhere in Jewish sources is there any of the reverence for the heroism of the fighter that is so prevalent in many non-Jewish cultures, even the most enlightened” (Leibowitz 369). という観察の通り、暴力との接点の不在が指摘されている。ユダヤ系によってヒーローと認識される人物と暴力との縁遠さも、“In Jewish history, the heroes are scholars and sages, rarely warriors” (Falk 85). という形で指摘されている。さらには、ユダヤ系が戦争を忌避する度合いの大きさが、“In contrast to this [the defining characteristic of twentieth-century civilization] focus on war and violence, Jewish tradition has neither glorified war nor exalted war makers” (Falk 85). という形で要約されている。

次に宗教的側面に目を向けると、ユダヤ教において信徒に課されている三大義務の一つにトーラの研究がある。以下の引用を参照すると、そのトーラにおいても暴力が強く忌避されている事実が分る。

The prohibition of human bloodshed is here assumed as it was in the case of Cain, the first human to shed the blood of a fellow human. Here too God presents himself as the prime lawgiver, and the ultimate judge of whether his law of antiviolenence has been kept or not. (Novak 38-39)

以上の通り、現実におけるユダヤ系の行動の実際に目を向けることなく、ユダヤ系知識人によって提示された心象風景的な自画像を確認すると、マラマッド文学において圧倒的多数を占めていたAタイプの暴力描写は、まさにユダヤ系の一般的な感性と調和していることが分る。そうであるならば、Aタイプは、ユダヤ系の一般的な価値観を視野に入れた上で確立された描写基調といえる。ところが、少数派の暴力描写であるBタイプと、反ユダヤ主義暴力に対抗する暴力の描写においては、暴力への否定的なスタンスは認められず、ユダヤ系の一般的な感性からは、むしろ逸脱している。つまり、マラマッドは、暴力描写に関しては例外を孕みつつも、ユダヤ系の多くに共有されている

一般的感性の上に立脚して創作活動を行っているのだ。

結論

マラマッド文学において、反ユダヤ主義的な暴力の描写に関しては、本稿で明らかにした基調の一貫性ゆえに、読者は唾棄する以外の選択肢を与えられない。ところが、反ユダヤ主義と関連していない暴力の描写には、唾棄することを読者は特に促されない。さらに、反ユダヤ主義暴力に反撃する暴力は、一変して肯定的な色彩を帯びていた。このように、全く別種の複数の暴力描写基調が、反ユダヤ主義との関連性の有無によって決定されている。この点から、創作時における、反ユダヤ主義に対するマラマッドの意識は作品全体の構造を継続的に支配するまでに鋭敏極まりなかったと判断できる。しかし、読者の不快感を刺激しない暴力描写は、マラマッド文学に横溢している、読者の不快感を強く喚起する傾向が強い暴力描写と比較すると、分量の点で極めて些少であり、多数派の暴力描写に埋没して目立つことが少ないだろう。そうであるならば、ユダヤ系の一般的な感性からすると異端的ともいえる少量の暴力描写を、ユダヤ的な感性に貫かれた多数派の暴力描写の中に忍ばせることにより、不分明な形で提示している作者の姿を指摘できよう。他のユダヤ系作家にも目を向けると、ロス (*Facts* 14)、Arthur Miller (26, 27)、Leslie Fielder (16, 161) などがエッセイや自伝において、アメリカの日常生活の中で反ユダヤ主義の被害にあった経験や、その深刻な脅威を覚えた過去に触れている。対照的にマラマッドの場合は、アメリカでの日常生活において遭遇した反ユダヤ主義への直接的な言及がインタビュー等においては見られない。つまり、直截的な発言のみを視野に入れる限りにおいて、マラマッドは反ユダヤ主義への意識が先鋭である作家とは映らない。そうであるならば、作者が対談やエッセイで直接語らぬ話題こそが、作者にとって重大な意義を有する可能性を、マラマッド文学の全体的構造は物語っているのである。

Works Cited

- Abramson, Edward. *Bernard Malamud Revisited*. New York: Twayne, 1993.
- Alter, Iska. *The Good Man's Dilemma: Social Criticism in the Fiction of Bernard Malamud*. New York: AMS Press, 1981.
- Avery, Evelyn, ed. *The Magic Worlds of Bernard Malamud*. New York: State University of New York Press, 2001.
- Falk, Randall, and Walter J. Harrelson. *Jews & Christians in Pursuit of Social Justice*. Nashville: Abingdon Press, 1996.
- Fiedler, Leslie. *Fiedler on the Roof: Essays on Literature and Jewish Identity*. Boston: Godine, 1991.
- Helterman, Jeffrey. *Understanding Bernard Malamud*. Columbia: U of South Carolina P, 1985.
- Hershinow, Sheldon. *Bernard Malamud*. New York: Frederick Ungar, 1980.

- Hoberman, John. "How Fiercely That Gentile Rides!": Jews, Horses, and Equestrian Style." *Jews, Sports, and the Rites of Citizenship*. Ed. Jack Kugelmass. Urbana: U of Illinois Press, 2007. 31-50.
- Leibowitz, Yeshayahu. "Heroism." *Contemporary Jewish Religious Thought: Original Essays on Critical Concepts, Movements, and Beliefs*. Ed. Arthur A. Cohen and Paul Mendes-Flohr. New York: Free Press, 1987. 363-70.
- Malamud, Bernard. *The Assistant*. 1957. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1963.
- . "Behold the Key." *The Magic Barrel*. 57-83.
- . "Black Is My Favorite Color." *Idiots First*. 17-30.
- . "The Death of Me." *Idiots First*. 57-67.
- . *Dubin's Lives*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979.
- . *The Fixer*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1966.
- . "The German Refugee." *Idiots First*. 195-212.
- . *God's Grace*. 1982. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1984.
- . *Idiots First*. 1963. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1986.
- . "The Jewbird." *Idiots First*. 101-13.
- . "The Lady of the Lake." *The Magic Barrel*. 105-33.
- . "The Loan." *The Magic Barrel*. 183-91.
- . *The Magic Barrel*. 1958. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980.
- . "Man in the Drawer." *Rembrandt's Hat*. 31-95.
- . *The Natural*. 1952. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1981.
- . *Pictures of Fidelman: An Exhibition*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1969.
- . *Rembrandt's Hat*. New York: Farrar Straus Giroux, 1973.
- . "Talking Horse." *Rembrandt's Hat*. 101-13.
- . *The Tenants*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971.
- Meshor, D. "Gorilla in the Myth: Malamud's *God's Grace*." Ed. Avery. 111-19.
- Miller, Arthur. *Timebends: A Life*. London: Methuen, 1987.
- Novak, David. *The Jewish Social Contract: An Essay in Political Theology*. Princeton: Princeton UP, 2005.
- Ozick, Cynthia. "Literary Blacks and Jews." *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays*. Eds. Leslie A. Field and Joyce W. Field. New Jersey: Prentice-Hall, 1975. 80-98.
- Richman, Sidney. *Bernard Malamud*. Boston: Twayne, 1966.
- Rosenberg, Warren. *Legacy of Rage: Jewish Masculinity, Violence, and Culture*. Amherst: U of Massachusetts P, 2001.
- Roth, Philip. *The Facts: A True Story*. 1988. Harmondsworth: Penguin, 1989.
- . *Patrimony: A True Story*. 1991. London: Vintage, 2016.
- Solotaroff, Robert. *Bernard Malamud: A Study of Short Fiction*. Boston: Twayne, 1989.
- Watts, Eileen. "Not True Although Truth: The Holocaust's Legacy in Three Malamud Stories: 'The German

マラマッド文学における暴力描写のユダヤ的特質について

Refugee,'Man in the Drawer,' and 'The Lady of the Lake.'" Ed. Avery. 139-52.